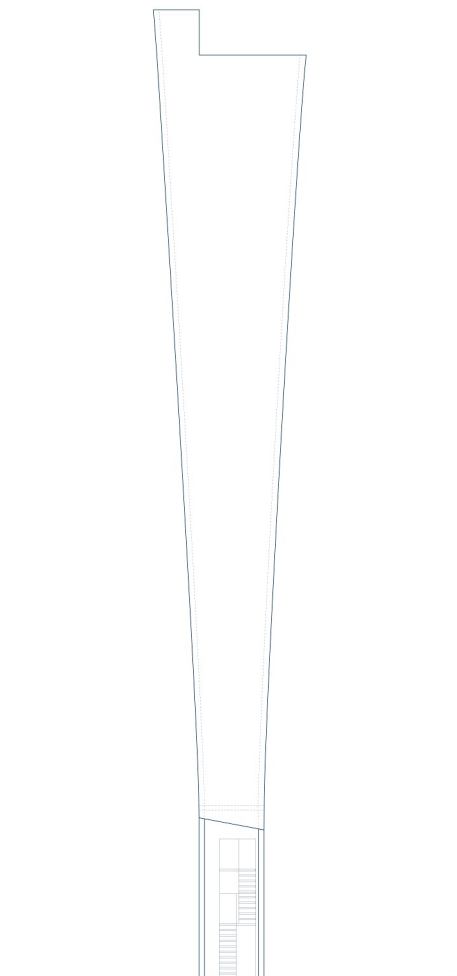


紺

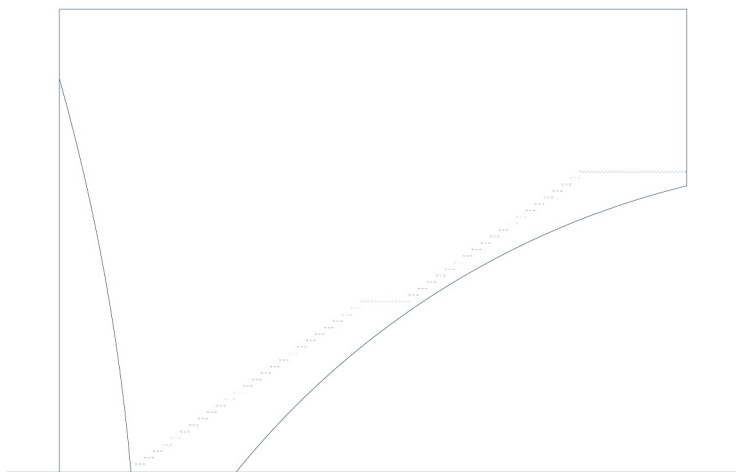
碧の憧憬



枕元をもち、八重の葉が一輪盛の上に咲いている。代助は昨夜まで、この花の香る音を聞いた。彼の耳には、それが運命を次市街から投げ付けた性響いた。夜が過ぎて、四時あたりが身かす所かとも思った。念のため、右の手を腰の上に載せて、助のはずれに正しく出る音を確かめながら眠りに就いた。

昂

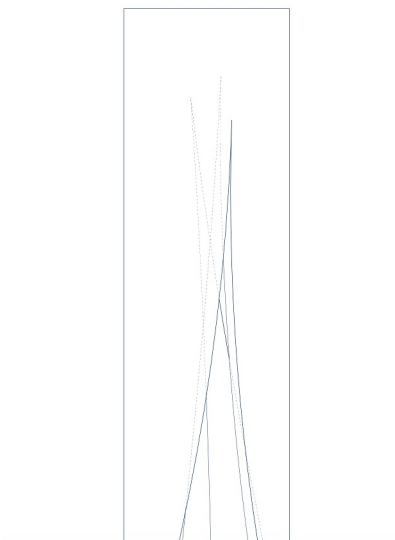
揚する山路



卒業の節も、衣食の煩いなしに、購読の利益を速意に取め得る身分を誇りにしていた。一頁も眼を通さないで、日を送ることがあると、習慣上何となく荒廃の感を催した
だから大抵な事故があっても、なるべく都合して、活字に頼しんだ。ある時は読書そのものが、唯一なる自己の本質の様な気がした
代簡は今茫然として、朝草を播らしながら、読み掛けた頁を二三枚あとへ繰ってみた。そこにどんな議論があって、それがどう致くのか
頭を拵える為に一寸骨を折った。その努力は群から残稿まへ移る程案ではなかった

遊

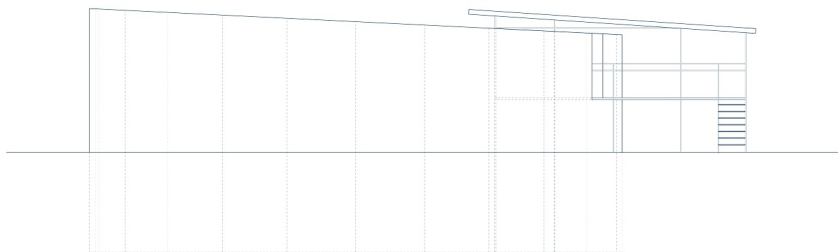
歩という快樂



しばらく、可思どう歩いているか夢中であつた。その間、防の頭には冷えた雨ばかりが降り付く様に響いて、な
彼は暗い小路に立つて、世界が一夜に忘れられつつある事を私かに告いだ。しかも五月雨の重い空に雨されて、歩けば歩く程、愈思する様な心持がた
神楽坂上へ出た時、急に雨が止んだ。身を促む無數の人で、無數の光が道を遠慮なく照らした。防は逃げる様に道を上がった

抱

擁と安穩



その夜は雨繼いの空が、地面を同じ様な色に見えた

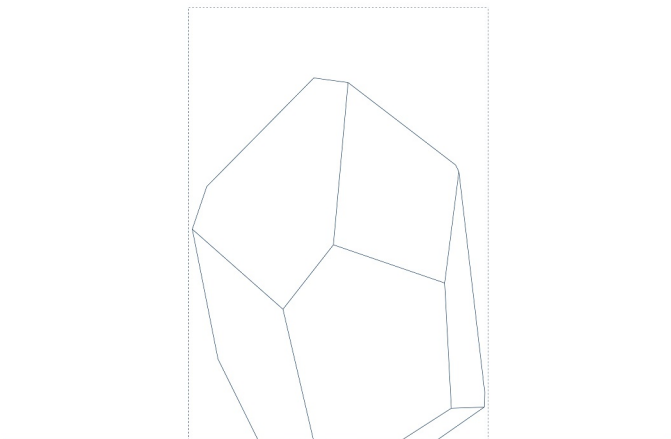
停留所の赤い柱の隣に、たった一人立って電車を待ち合わせしていると

遠い向うから小さい火の玉があらわれて

それが一直線に暗い中を上下に揺れつつ代助の方に近づいて来るのが非常に淋しく感ぜられた

求

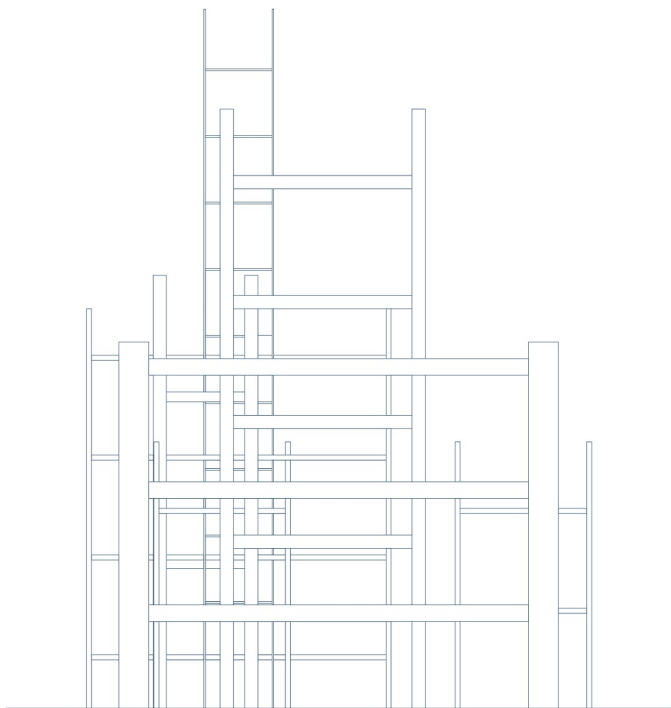
心する野望



頭の中には職業の二字が大きな楷書で焼き付けられていたそれを押し退けると、物質的供給の杜絶がしきりに湧り狂った
それが影を消すと、三千代の未来が凄まじく覆れた。不安の旋風が吹き込んだ
三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回転した。その結果として、彼の周囲が悉く回転しだした

静

寂の木立



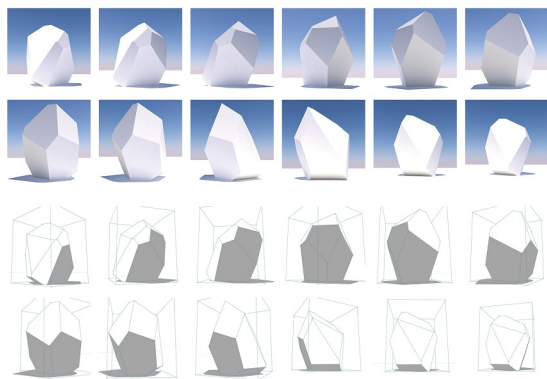
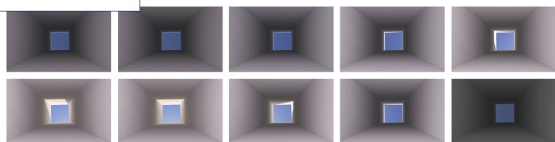
富田の家は谷中の山本町で、庭のまいでり、庭園へ出ると、上野の森の古い杉が高々見えたり、それがまた、樹々の影に、細る緑の、色をしていた。その一本は角ど折れ曲がって、上の方には葉の影ばかり残った所に、夕方になると鳥が沢山集まって鳴いている。

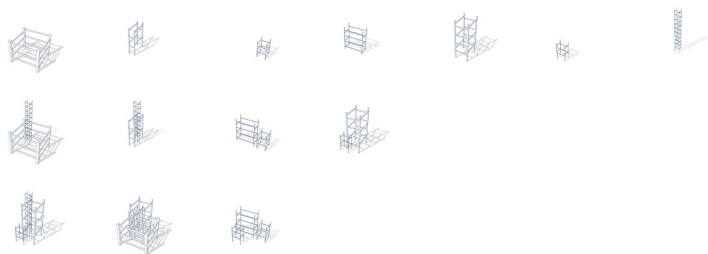
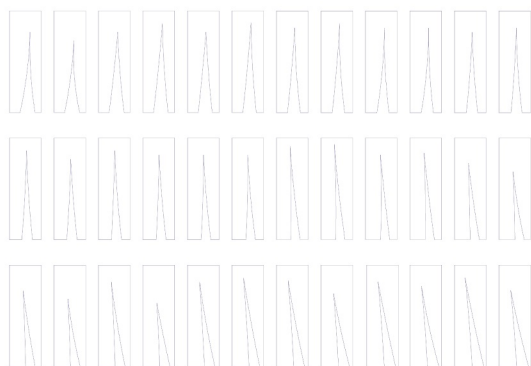
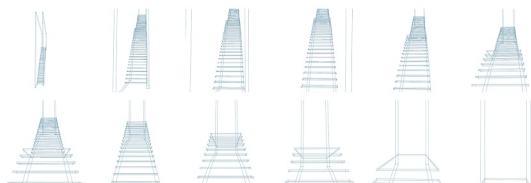
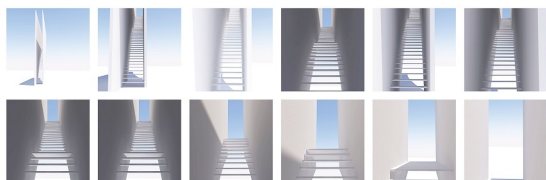
No.4

創造

6種の「ひとり」空間

山崎を登りながら

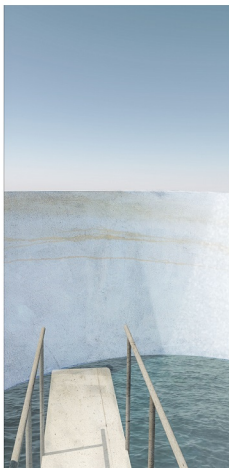




「ひとり」空間の創造

「明き間のファンファーレ」

都市のラグジュアリーを目指して



No.1

序

都市における
「ひとり」空間とは

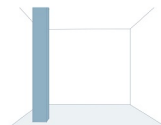


都市に集まる多くの人々

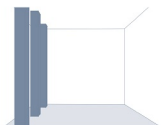


都市に暮らす「ひとり」の自分

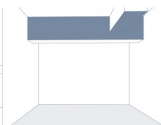
大量で多様な個人が集まる都市だからこそ「ひとり」になれる場所が必要ではないか。自分の「ひとり」を肯定してくれる「建築」をつくることができないか。



柱



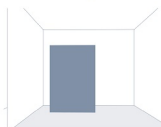
列柱



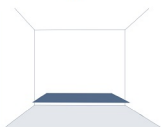
梁



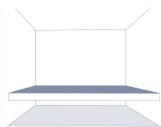
柱梁



壁



水平面



スラブ



階段



天井開口



頂側意



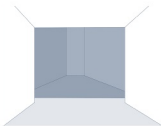
側意



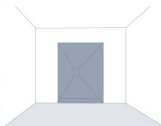
外部連続



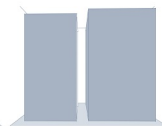
連続空間



小空間からの拡張



小空間への収束



隙間

No.2

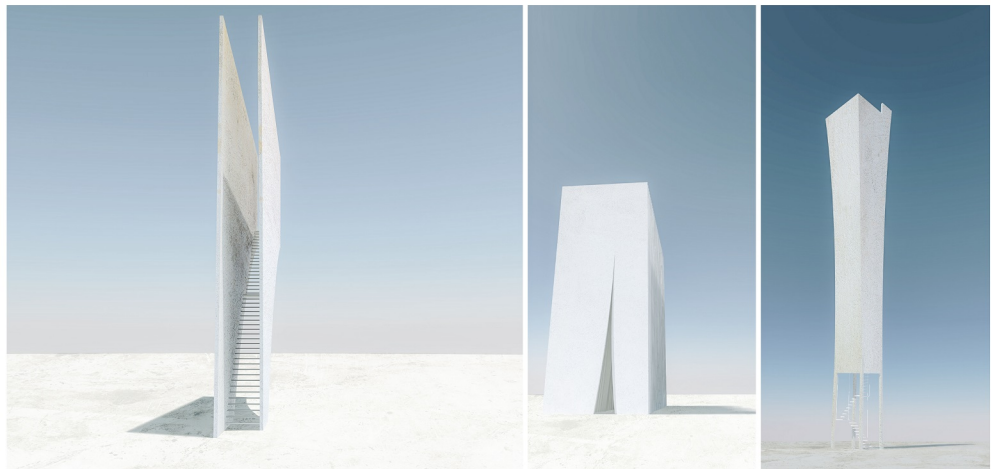
読み替え

建築の構成要素を再考する

「ひとり」を肯定する空間とは
他人に侵されないラグジュアリーな
空間である。

「自己」と「他者」の境界を
「建築」として構築することで
「ひとり」空間を強化する。

「境界」をデザインしうる
実際の建築を構成する要素を
「ひとり」のためのラグジュアリーへと
読み替える。



No.3

孤独

「ひとり」を許容する
空間のための method

孤独は孤立や悲哀とは異なる。
「自己」への内省を深め、
実社会での「他者」への理解に
繋がる。

自分が感じたラグジュアリーの
記憶と身体感覚をもとに
method を鈍化させる。

- ①スケールの拡張
- ②エレメントの反復・干渉
- ③包容
- ④眺望・可視性
- ⑤隠れ家的可能性

さらにスケッチをさし繰り返し
6つの自分のための
「ひとり」空間を創出した。

